弥陀回向の法

江上浄信

一

「たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」という簡明直截な言葉には、師法然からうけたまわりさだめられた真実の仏道、真宗領解が告白されている。ここにはよきひととの出遇いにはじまる親鸞の全生涯が語りつくされているとともに、遇教の慶喜が業縁の人生を生き抜いてきた、ただ念仏の一道の歩みがある。いいかえれば、「しょうじいづべき」念仏往生の生活、「念仏成仏是れ真宗」そのものを開示した言葉であるといっていいであろう。

親鸞は『選択集』標宗の文の領解を『尊号真像銘文』に

「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」といふは、安養浄土の往生の正因は念仏を本とすとまふす御こと也としるべし、正因といふは、浄土にむまれて仏にかならずなるたねとまふすなり。

といい、総結三選の文について

「選応専正定」といふは、えらびて正定の業をふたごゝろなく修すべしと也。「正定之業者即是称仏名」といふは、正定の業因は、すなわちこれ仏名をとなふる也、正定の因といふは、かならず無上涅槃のさとりをひらくたねとまふすなり。

といって、「いづれの行もをよびがたき身」にとって大涅槃界そのものに相応する行をただ称名念仏の一行であると受けとめたのである。しからば、称名念仏を何故に「浄土にむまれて仏にかならずなるたねとまふすなり」といい、「無上涅槃のさとりをひらくたねとまふすなり」と断言したのであろうか。

このことについて『銘文』には更につづいて、親鸞は当然のように

御名を称するは、かならず安楽浄土に往生をうる也。仏の本願によるがゆへなりとのたまえり。

と師法然の「称名必得生依仏本願故」の言葉をそのまま表顕している。しかしながら、この『銘文』の文は『選択集』総結三選の文を簡結に解説した文章の一部であるという理由にもよるのであるが、この言葉が『選択集』総結の文であることは殊に注意をはらうべきである。何故ならば、それは浄土真宗がこれを母胎として生まれ、発想の根源をここに求めていることはいうまでもないからである。

ところで『選択集』はその「選択本願念仏集」という題号が標顕するように阿弥陀仏の選択本願に根拠して、念仏往生の独立ということをその主題とするのである。蓋し、全巻を貫く表現を見る時、客観的には、旧来の仏教一般が依って立つ、人間から仏への方向において念仏往生の体系が構成され、「選択本願念仏」といっても、客観的叙述にしたがう限り、聖道門一般の難行諸善に代る、易行浄土の念仏として説きあらわされている印象を拭いきれないものがある。それ故にその念仏はわれわれの行ずるもろもろの三業の行為と同列にしか評価しない立場を脱しきれないものが残されているようであって、この限りでは念仏は決して高く評価されないことは当然といわねばならない。

しかし、このような性格をもつものでありながら、決して見逃してならない表現が随所に見られるのであって、それは題号及び標宗の文をはじめ総結の文はもとより、これによって顕示される念仏が、特に衆生不回向の行と宣言されている事実は、何よりも注意しなければならない。

もし、念仏以外の雑行を行ずる場合は

必ず回向を用ふるの時、往生の因と成る、もし回向を用ひざるの時は往生の因と成らず（二行章）

というのに対し、念仏はひとり

縱令別に回向を用ひざれども自然に往生の業と成る

と断言している。念仏は不回向である、とは彼の如来浄土に対してわれわれの側からする修因感果の方向を厳しく拒む言葉であり、さらには自力聖道門的論理の全面否定である。このことを押えずしては「往生之業念仏教本」の主張も、ついに相対化をまぬがれなかっに違いない。

しかるに念仏は不回向であるといいきられるとき、はじめて念仏の本質が顕示せられる。即ち念仏はあきらかに、われわれの三業雑毒虚仮の行、衆生回向の行とは全く質を異にした「弥陀如来本願の行」であり、もともと仏のものであったのである。まことに「称名念仏は是れ彼の仏の本願の行」（二行章）であり、「念仏は是れ法蔵比丘二百一十億の中に於て選択する所の往生の行」（慇懃付属章）であって、さらには「平等の慈悲に催されて普く一切を摂せんがため」という阿弥陀仏の慈悲そのものである。「選択本願念仏」とは実にこのような念仏の本質を根源的に表現した言葉に外ならないのであって、すでに念仏は仏のものである。

往生の行はわれらがさかしくいまはじめはからふべきことにあらず、みなさだめおけることなり。〈中略〉念仏を申して往生を願はむ人は、自力にて往生すべきにはあらず。ただ他力の往生也。（『西方指南抄』）

とするならば、それはいやしくも、われわれから仏への方向においてとらえるべきものではなく、逆に仏から衆生への新たな方向においてのみ受けとらるべきである。

ここに念仏とは普通に考えられるように、単にわれわれから仏を念ずる行為ではなく、逆に仏がわれわれを念ずる仏の「憶念衆生」（摂取章引文）である。この仏の念力がはたらく故にわれわれ衆生がただ念仏もうす身となるということである。念仏はまさに仏力の表現であり、彼の仏の願力の現行するすがたであって、「当知本願重願不虚」とい

われる所以である。以下、称名念仏が弥陀回向の法であるという意趣を考察してみたい。

二

真実信心の称名は
　弥陀廻向の法なれば
　不廻向となづけてぞ
　自力の称念きらはるゝ

この『正像末和讃』第三句「不廻向」の左訓には

きやうしやのゑかうにあらす　かるかゆへにふゑかうといふ　わうしやうえうしふにあかせり（顕智書写本）
きやうしやのゑかうにあらすとしるへしとなりわうしやうえうしふにみえたり（草稿本）

と明記されている。注意すべきは、ここに「不廻向」が『往生要集』に明かされていると領受されていることである。われわれは他力廻向は曇鸞、不廻向は法然に親しく顕わされていると見るのが妥当のように思う。それにも拘らず、『往生要集』を挙げているのは如何なる根拠によるものであろうか。

「夫れ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり」と起筆した『往生要集』は、自らの歴史的課題を「予が如き頑魯の者」という深い自傷において、不安な現在に直結する救いを一代仏教に尋ねていったものである。その「広開一代教」の眼目となったものこそ「念仏の一門」にほかならなかった。蓋し、源信は念仏の一門を説きながらも、第五門助念方法にその「念」は称を拒まず、観を捨てず、「或は唱念倶に運び、或は先に念じ後に唱へ、或は先に唱へて後に念ず、唱念相継いで休息する時なく声々唯だ阿弥陀に在れ」という『摩訶止観』の語をそのまま行修すべきことを勧めている。また「仏」は「これ三身一体の身なり」といい、「諸仏同体の相好光明なり」と、名と体との別をせず、

弥陀と諸仏との異に執われないのである。かくして念仏に漏れる仏はなく、仏を念ずるについて規定はない。さればこそ法然や親鸞の念仏と対比して、源信のそれは純粋性を欠くように思われる。

ところで法然は『往生要集』第五門助念方法の総結要行から「往生之業念仏為本」の一句を発見し、その念仏こそは「選択本願念仏」南無阿弥陀仏であると心証し、『選択集』の標宗としている。法然の意では念仏とは称名であることはいうまでもない。しかし、それは単に源信の一句を転用したのではなく、源信においても称名こそ本意であったと領解したからにほかならない。このことを明らにするために法然は『往生要集』を幾度となく披読し、『大綱』『料簡』『略料簡』『詮要』の四部を著わしている。その『大綱』『料簡』『詮要』では「念仏に二有り」として「一つには但念仏、二つには助念仏を以て決定の業と為る歟。但し善導和尚の御意は爾らず歟。」といいつつ、「往生要集の意、称念仏を以て往生の至要と為る也」と釈している。恐らく『往生要集』を客観的に見る立場では、前者のごとく「歟」と推量を以て表わすほかはないであろう。蓋し、『往生要集』に親しみ、聖道難行の悲歎の底で「予が如き下機の輩のために」自身の道を見出そうとした法然は『往生要集』における念仏の真意を「称念仏を以て往生の至要と為る也」と看破し、断言の言葉で顕わし、その確証となるものが、ほかならぬ善導の教学であったにちがいない。

「とこしなえに楞厳横河の余流をたたえて」等と伝えられる如く、親鸞も源信の在住した首楞厳院において、堂僧として常行三昧を修したものとすれば、源信を追慕する感情は特に深いものがあったに違いないし、それが生涯『往生要集』を忘れ難いものにしたといっていいであろう。

されば当面の課題である不廻向の左訓について、われわれはいかに領解すべきであろうか。『正像末和讃鑽仰』（香月院深励）には総結要行の「深く信じて誠を至して常に仏を念ずるとは願に随いて決定して極楽に生まる」の文に注目し、「願に随いて」のところに念仏不廻向の意を見出している。『正像末和讃管窺録』（如説院恵剣）には、第四正修念仏門の第五回向門に

第五に廻向門を明さば、五義具足するもの、是れ真の廻向なり。一にには三世の一切の善根を聚集す。華厳経意 二には薩婆若心と相応す。三には此の善根を以て一切衆生と共にす。四には無上菩提に廻向す。五には能施・所施・施物皆不可得なりと観じて、能く諸法の実相と和合せ令むるなり。大論意 此等の義に依て、心に念ひ口に言ひ、修する所の功徳と及以び三際の一切善根とを、一自他法界の一切衆生に廻向して、平等に利益し、二滅罪生善して共に極楽に生じて、普賢の行願を速疾に円満し、自他同じく無上の菩提を証して、未来際を尽くすまで衆生を利益し、三法界に廻施して、四大菩提に廻向するなり。五

と論じ、更にこれに続いて問答を展開しているのであって、この文を論拠として『管窺録』には、

無相と有相との差別を明し、五義具足の無相の回向を真の回向とすることを釈したまふ。能施所施施物みな不可得なりと観じてよく諸法実相と和合せしむるを無相回向とす。今弥陀回向の法は行者の方よりなさぬ回向なるが故に不回向と名くと示したまふ。左訓に往生要集に見えたりとはこの義なるべし。

といい、更に、

行者の心相に露ばかりも回向すること無きを真の如来の回向とするが故にこれ無相の真の回向にして五義具足す。自力の称念は行者の心相に回向する情想あるを以ての故に有相の回向と謂つべし。（中略）要集の釈の意に依て自力の回向を有相回向とし、如来の回向にして行者の回向に非ざるを不回向と名くることを顕したまふが祖師の意と見えたり。

と指摘している。確かに直接の典拠をいうならば、上述の如くであろう。

蓋し、ここに想起すべきは「行巻」の

明らかに知りぬ。是れ凡聖自力の行に非ず、故に不廻向の行と名づくるなり。

という親鸞の教言である。勿論、古来この教言は遠く龍樹以来の三国の祖師の教説の領受であるといわれてきたので

あるが、特に源信・法然二師の教説に対しての領解と見ることも許されるであろう。とするならば、広汎な『往生要集』の中から親鸞自身に特に感銘深い「行巻」の引文こそ、『往生要集』一部を顕わす精要であり、源信の往生の真実行として注意すべきであろう。

三

「行巻」所引の『往生要集』の文は四文である。その第一は第八念仏証拠門の一節である。この一門は十部の経論によって念仏を証明するものであって、その中、第二・第三・第四の証拠の文が引用されている。

往生要集に云はく、

双巻経の三輩之業、浅深有りと雖も、然るに通じて皆一向専念無量寿仏と云へり。三に四十八願の中に念仏門に於て別して一の願を発して云はく、乃至十念若不生者不取正覚と。

四に観経には極重の悪人、他の方便無し、唯だ弥陀を称して極楽に生ることを得と。

この引文に「双巻経の三輩之業、浅深有りと雖も、然るに通じて皆一向専念無量寿仏と云へり」とは、三輩九品とわかれて機の善悪はあっても、一切の往生人はいづれも皆念仏することを眼目とする源信の自督が説かれたものであって、念仏こそ三輩を簡ばない一乗無上の法を明かすものである。「男女貴賤、行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜず、之を修するに難からず乃至願求往生に至るに其の便宜を得るは念仏に如かず」との領解は念仏こそ往生に欠くことのできない純粋願生の行であるということである。まことに念仏が純粋な願生の行であるとき、その念仏において、われわれはすでに如来招喚の声を聞く。念仏が純粋なる願生の行であるということ自体が、凡夫自力の行に非ずして如来廻向の行であることを知らしめる。それ故にわれわれは念仏して願生することによって、自然に本願へと帰入するのである。かくて源信は三輩念仏往生の文に次いで、乃至十念若不生者不取正覚の本願の文を挙げ、三輩の一向専

念無量寿仏は如来の本願に乗じ同じく念仏するものであることを明示し、念仏往生の道は在家出家を簡ばず、善人・悪人を論じないことを顕わしたのである。

しかしながら、真に如来の招喚を聞く者は、まさに自己の罪業深重に悲泣する者である。悲泣いよいよ深くして招喚の声は如来の大悲願心から現われるものであることを信知する。信知とは明らかに知ることである。明らかに知るとは、自己の不実を知り、同時にこのもののために生起した本願の大悲を信ずることである。「別して一の願を発して云はく、乃至十念若不生者不取正覚と」という簡明な源信の言葉に、われわれは深い本願の心を領受しなければならない。ここには念仏往生でなければ永遠に救われない十方衆生の無明の黒闇に対する大悲が耀く。されば真に如来の招喚の声を聞く者は、願生しつつも深く現実の闇の悲痛となる。ここにおいて「極重の悪人、他の方便無し、唯だ弥陀を称して極楽に生ることを得と」という。それは三輩の行者が如実に如来の本願を聞信する心境にほかならない。それ故、三輩の下輩のみならず、出家・在家・善人・悪人すべてが極重悪人というほかはない。しかも如来の本願のいわれを聞き、正しく仏智に照らされて極重悪人と知るのである。ここでは一個の存在としてありえた自己も、如来の真実に値いえたとき、全く崩壊しもはやわれとして誇るべき何ものも存在しない。それ故「ただ念仏のみぞまこと」と領受し、そのままにして念仏を行ずるよりほかはないのである。念仏こそ極重悪人がそのまま如来の本願に乗托する行である。かくして極悪の衆生は念仏の衆生となり、「唯だ弥陀を称して極楽に生ることを得」るのである。念仏において如来の功徳はそのまま罪障の我が身に念々に如来から与えられ、如来から回向したまうことを感知する。それはわれわれからいうならば、どこまでも不回向としかいいようがない。それは「ただ念仏」においてのみ信知される事実である。

第二に親鸞は『往生要集』正修念仏門における礼拝を説く文を引用している。それは源信が礼拝念仏を説くについて、特に『心地観経』の如来六種功徳の文と、その文の六種功徳の一々について自らの領解を述べたものである。そ

の領解について親鸞は「此の六種の功徳に依りて、信和尚の云はく」といって

一には念ず応し。一称南無仏皆已成仏道の故に、我れ無上功徳田を帰命し礼したてまつる。二には念ず応し。慈眼をもて衆生を視はすこと平等にして一子の如し。三には念ず応し。十方の諸大士、弥陀尊を恭敬したてまつるが故に、我れ無上両足尊を帰命し礼したてまつる。四には念ず応し。一たび仏名を聞くことを得ること優曇華於りも過ぎたり。故に我れ極難値遇者を帰命し礼したてまつる。五には念ず応し。一百倶胝界には二尊並んで出でたまはず。故に我れ希有大法王を帰命し礼したてまつる。六には念ず応し。仏法衆徳海は三世同じく一体なり。故に我れ円融万徳尊を帰命し礼したてまつる。

という。『往生要集』におけるこの文の義意は五念門の第一礼拝門の釈義であるが、五念門は畢竟五念仏門であり、この六種すべての冒頭に「念ず応し」として、源信が実に敬虔無比の相を以て如来の前に跪坐し、その大悲真実を渇仰恭敬されていることを頭すものである。経説と源信の領解と対照するとき、そこに極めて積極的な意味をもつ独自の確かめを見ることができる。即ち、経においては客体的な如来の功徳であったものが、源信にあっては悉く応念帰命礼の主体的いのちとして感得されていることである。このことは親鸞に深い共感を呼ぶとともに、極めて重要な意味をもつ。源信の領解を通して無上功徳田より円融万徳尊にいたる功徳は、一声称念によって回向せられるものであることが確かに身証されていた事実を物語るものである。この六種の功徳はそれ自体まさしく名号の内容に外ならないのであって、ここに親鸞は不回向の意趣を領受したものといっていいであろう。

また経では諸仏の功徳であったものが、源信では阿弥陀仏の功徳となり、諸仏のあらゆる勝徳は阿弥陀一仏において統摂され、仏徳讃歎の意を如実にあらわすものとして受けとめられている。更に、源信の領解は一は『法華経』方便品、二は普門品と『涅槃経』・『心地観経』、三・四は『無量寿経』、五・六は『仁王経』に基づくものであって、ここにも源信が「広く一代経を開」いて、それを念仏の意に領受されていた実践的事実をあらためて見ることができる。

「行巻」における『往生要集』の後の二文は、前の二文に説く念仏の功徳を喩説するものであって、波利質多樹の華の喩は作願門を釈するに当って、『華厳経』の菩提心の喩を嘆ずるものであって、親鸞の引意は一向専念無量寿仏の念仏の徳が一切の功徳に勝れていることを讃喩したものである。波利質多樹は忉利天の喜思城にある香水とされ、それによってわれわれは念仏が彼岸の善であることを象徴されたものと見るべきであろう。

最後の引文は『往生要集』第十問答料簡門の第五臨終念仏相を示す文の中に源信私加の十喩があり、そのうち念仏が転悪成徳であることを説く、石汁と忍辱と尸利沙の三つの譬を抄出し、念仏の勝徳、不可思議のはたらきを喩顕したものである。

上来、「行巻」所引の『往生要集』の四文の叙述にしたがって、不回向が『要集』に明かせりという左訓の意趣について考察すべく、特に源信教学の真髄とこれに対する親鸞の領受を手がかりとして、その教説の「行巻」における地位を推求してきたところである。以上の考察によれば、不回向の教説は源信においても、親鸞においても、共に念仏領受の重大なきめてとして深い関心がよせられたところであった。まことに日本浄土教は源信によって基礎づけられ、法然によって大成し、真に十方衆生の宗教として、同一念仏の仏道が開顕されたのである。「明らかに知りぬ。是れ凡聖自力の行に非ず、故に不廻向の行と名づくるなり」という親鸞の領解は、特に源信・法然二師の教説を思念せしめるものの多いことは否定し得ない。

四

親鸞は、『教行信証』『浄土文類聚鈔』にわれわれの往生浄土の行信・因果・往還ことごとく阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところにあらざることあることなしと深い感動をもって顕示するのであって、浄土真宗が無辺の極濁悪を拯済したまう救済の宗教とされる所以も、この不回向の行としての他力回向論によるといっていい。

いうまでもなく、その他力回向論の中心となるものは、特に往相回向の大行論であるといっていいであろう。何故なら仏と衆生の接点は、念仏の行信を他にしては求められないからである。それ故に『一念多念文意』には

回向は本願の名号をもて、十方衆生にあたへたまふ御のりなり。

と領解するところである。即ち、無碍の仏心大悲が称名念仏として、われわれの三業にまでいたりとどくという意趣である。それはよき人法然の念仏不回向論に直結した確かな領きであり、これを根源的に表現したものといっていいであろう。かくして他力回向論は、「真実信心の称名」念仏が往相回向の大行であり、「弥陀回向の法」であって、「阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへる所」の大行そのものであるという点の確認にしぼられてくる。

すでに念仏が仏の回向であり、仏が大悲同感して苦悩の有情を捨て得ずして「われらにあたえたま」うた法であるとするならば、回向の行信をもって、そのままわれわれ自身の行信といっていいであろうか。それは当否いづれともいうことはできないであろう。何故なら、正当といえない所以は、われわれの内に深く感ぜられるものは穢悪汚染にして清浄の心なく、虚仮諂偽にして真実の心なしという事実だけであるからにほかならない。否といえない所以は、その内観において疑いなきものは仏の大悲の願心であるからである。それ故、念仏は仏の回向の行であるが、われわれに親しまれるものは、仏の名号である。信心は「たまはりたる」ものであるが、われわれに感ぜられるものは、ただ本願の大悲心である。

されば「専ら斯の行に奉へ、唯斯の信を崇めよ」といい、「斯の行信に帰命すれば、摂取して捨てたまはず」ということは、即ち回向の行信は、われわれのものとして執わるべきものでないことを顕示するものであるといっていい。回向の行信は大悲の仏心においてわれわれのものであり、われわれの心においては仏のものである。

まことに念仏はわれわれの口業に行ぜられつつ、しかも念々みなこれ仏のものであり、その根源的主体は常に仏そのものにあるのであって、『尊号真像銘文』に

真実信心えたる人は、大願業力のゆへに、自然に浄土の業因たがはずして、かの業力にひかるゝゆへにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきわまりなしとのたまへる也

といい、往相回向の心行をうれば、正定聚に住し、かならず滅度にいたるといわれる所以である。この故にこそ「業惑に纏縛」せられる「薄地の凡夫」の念仏もよく正定の業となり、「無上涅槃のさとりをひらくたね」となることが、『尊号真像銘文』には確信をもっていい切られるのであって、

念仏往生の願因によりて必至滅度の願果をうるなり（『三経往生文類』）

といい、

本願を信じ念仏まふさば仏になる（『歎異抄』十二）

ということが、ここに頷かれる。

『教行信証』「行巻」はまさしくこのような往相回向の大行を明らかにするのである。即ち、念仏はわれわれが行じながらも、その主体はつねに仏にあって、本来仏のものであるということを明らかにすることを主要課題とするものである。

それ故に最初に大行をあらわすについて、ことさらに

大行とは則ち無导光如来の名を称するなり。

と定義されるのである。その無导光如来とは『御消息集』九には

よろづのもののあさましき、わるきことにはさわりなく、たすけたまはんれうに無导光仏とまふすとしらせたまふべくさふらふ。

であって、それは、「よろづの衆生をきらはず、さはりなく、へだてず、みちびきたま」（『一多文意』）わんがために「一如宝海よりかたちをあらわし」（同上）「十方微塵世界にみち〳〵たまうて」（同上）「もの〻にぐるをおわえとる」

（国宝本　弥陀経意和讃左訓）阿弥陀仏の摂取不捨のはたらき、「絶対無限の妙用」そのものである。

されば、われわれが念仏申すということは、いま現に法性・真如を背景として、「光明無量の本願、寿命無量の弘誓を本としてあらはれたまへる」（『唯信鈔文意』）「報身如来」（同上）「すなはち阿弥陀如来」（同上）が、われわれの主体としては現働しつつあるという事実の証左であり、したがって、われわれは念々にこの主体に帰せしめられずにはいない。

それ故に「行巻」ではこのことを

斯の行は即ち是れ諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり。極速円満す。真如一実の功徳宝海なり、故に大行と名づく。

とたたえながら、続いて

然るに斯の行は大悲の願より出でたり。

といって、念仏出生の根源を挙げられてくる。「大悲の願」とは「諸仏称名の願」であって、念仏がこの大悲の願から出るとは、われわれが行ずる念仏の主体が、まさしく仏にあることを明示するものにほかならない。

それ故に『唯信鈔文意』には、尽十方無碍光如来について

この如来を報身とまふす、すなはち誓願の業因にむくいたまひて、報身如来とまふすなり。報といふはたねにむくいたるなり。

と述べ、つづいて特に

この報身より応化等の無量無数の身をあらはして微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまふゆゑに、尽十方無碍光仏とまふす。

というのである。まさしく無碍光仏の無尋自在なる摂取のはたらきが、阿弥陀報身からあらわれた無量無数の応化等

の諸仏の称名によって、一切群生海の心にみちみちて、よくその主体となる内景を語るものである。

されば、既に先学によって指摘されるごとくに、『大無量寿経』において、諸仏称名の願が誓われるに至るまでの本願展開の次第も、これに呼応していると見ることができる。すなわち、第十一必至滅度の願の滅度・一如・大涅槃界、絶対寂静を背景として、第十二・第十三の光明無量、寿命無量の阿弥陀の仏身成就の願がひらかれる。つづいてその光明無量の願の浄土において実現した相が、第十四声聞無数の願であり、寿命無量の願が波及し、具体的になったのが第十五眷属長寿の願であり、第十七願に弥陀が十方の諸仏に称められる前に第十六離譏嫌名が願われるのは自然である。即ちこの第十四・十五・十六の三願は、光寿無量の阿弥陀が真に光寿無量である所以、即ちよく十方微塵世界にみちみちて一切衆生をして阿弥陀と等しく、異りあることなからしめんとする願い、はたらきを具体的に説きあらわすのである。これをうけつつ、このような阿弥陀のはたらきを称揚し、称讃して、十方衆生にすすめ聞かしめ、弥陀の名号のほかに衆生の救われる道のないことを明らかにし、念仏そのものが諸仏証誠護念の大道であることを知らしめんとするものが第十七の諸仏称名の願である。このようにして、念仏がこの願から出生して、第十八願の十方衆生界にみちみつということは、われわれが称え行ずる念仏でありつつ、念々が仏のものであり、その主体はつねに仏にあることを明示するものと思う。

まことに、念仏はわれわれの三業を場としながら、そのまま「浄土真実の行」であり、「選択本願の行」である。即ち、それは苦悩せるものを愍んで大悲の阿弥陀仏が名のりでて、われわれのところにまで来現して、そうしてわれわれの主体となって、われわれをして、阿弥陀の徳を獲得せしめ生死の苦海をいでしめるのである。このことをわれわれに信知せしめるべく「諸仏称名の願とまふし、諸仏咨嗟の願とまふしさふらふなるは十方衆生をすゝめ」「また十方衆生の疑心をとどめん」(『御消息集』)ために、この報身より応化等の身をあらわした、無量無数の諸仏をして、称名せしめるのであって、われわれはこれを聞いて、またよく念仏申す身と転成する。この願が特に「往相回向の

願」と呼ばれ、ここからあらわれたわれわれの念仏が

弥陀の御もよほしにあづかりて念仏申しさふらう

と『歎異抄』第六条にいわれる所以はここにあると思う。

五

かくして「諸仏称名の願」から説き起こされた「行巻」は、つづいて願成就文等をはじめとする聖言をかかげ、龍樹・天親・曇鸞の論説、道綽・善導の釈文・疏文を連引し、更に広く中国諸宗の人師の釈文をも引き、源信・源空におよぶのである。無辺光仏の無碍のちかいは、諸仏の称名として歴史的には先づ釈尊の教説とあらわれ、真宗の七祖として、さらにひろく諸宗の人々を動かし、ついにわれわれのここまで来りとどかずにはいられない事実を、これによって実証するものであろう。

この間に、親鸞自身の領解私釈は、称名破満の釈といい、善導の六字釈に対する領解といい、更に不回向釈といい、いずれも、念仏とは仏自らがわれわれの主体となって、われわれをして真の仏道を行ぜしめつつある事実の確かめでないものはない。それ故に念仏は

能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満てたまふ

のである。ここに破闇満願の徳の確かめは、常に無明海に流転し、衆苦輪に繫縛された身にとって、なにものにもかえがたいものであったにちがいない。更に六字釈に対する領解も善導の用語の一句一句を綿密に領受しつつ、親鸞己証の六字の義を開闡したものであって、まさしくこの弥陀回向の法の事実を開顕していくほかはない。

即ち、その名号六字について、南無の二字を主として阿弥陀仏の四字をこれに摂め、南無の訳語である帰命を、帰せよとの本願の勅命として領受し、名号が全く如来の本願に出づるものであることを明徴している。善導の「言南無

者即是帰命」を親鸞は「南無之言は帰命なり」と領受した。ここには「南無というは」ではなく、「南無之言は」という。それは「精進なるこゝろもなし、懈怠のこゝろのみにして、うちはむなしくいつわり、かざり、へつらうこころのみつねにして、まことなるこゝろなき身」（『唯信鈔文意』）の上に、「南無之言」、南無ともうす「みことば」が現われたことの確認といっていいであろう。親鸞は「大悲の願より出でた」る南無阿弥陀仏、即ち弥陀の回向に値遇したのである。親鸞は「南無之言」のうちに、弥陀のまねく、よばう声を聞き、曠劫よりこのかた常に招喚されていた自己を信知したのである。ここに帰と命の字訓を綜合して、「是を以て帰命は本願の勅命なり」というのであって、衆生の上に限定されやすい帰命の言葉を本願の大悲心から帰せよと招喚される教令として領受した。この帰命の事実こそ衆生を救済したまう阿弥陀の最も具体的なはたらきである。

このことに目ざめるとき、浄土に生まれんと願う心は、浄土へ生まれしめんとする阿弥陀の発願のあらわれ、「発願回向」であると頷かれる。そのかぎり南無阿弥陀仏とは衆生に先立って「如来已に発願したまふ」ものである。しかし、それはまた「廻施」したまうことにおいて、徹底して「衆生の行」となるのである。阿弥陀は自らを衆生の行とすることにおいて衆生の救いを成就する。

されば南無阿弥陀仏は、阿弥陀により「選択」された「本願」そのままの現われにほかならない。それ故「必ず往生を得る」必然性は、現に阿弥陀の本願のはたらきを生きる身として、現在に証しされつつある事実となっている。これを名号を聞くところに即時に退転なき道が開かれることとして「即時入必定」といい、「現生不退」というのである。

念仏とはその本質において完全に仏のものであり、仏が我々の主体となって他力金剛心を成就し「報土の真因を決定」せしめ、よく涅槃せしめるといわれるのである。それ故にこそ、それは明らかに「凡聖自力の行に非ず、故に不回向の行」であって、

大小の聖人・重軽の悪人、皆同じく斉しく選択の大宝海に帰して念仏成仏すべし。

といいきられるのである。「選択の大宝海」とは「行巻」のはじめの真如一実功徳宝海に対応し、『一念多念文意』には

真実功徳とまふすは名号なり。一実真如の妙理円満せるが故に大宝海にたとへたまふなり。一実真如とまふすは無上大涅槃なり……法性……如来なり。宝海とまふすはよろづの衆生をきらはず、さはりなく、へだてず、みちびきたまふを大海の水のへだてなきにたとへたまへるなり。

と述べられている。それ故に、また後には「行巻」を結ぶに先立って、特に他力・一乗海釈を設け、上来を承けつつ、念仏成仏のこの一道こそ真の一乗であり、仏乗そのものであり、したがって、まさしく阿耨菩提・涅槃界に証入する第一義乗であり、唯一絶対の誓願一仏乗であることを確信をこめていいきっているのである。これによって、我々は無上涅槃界に証入し、唯一の仏道こそ念仏成仏是真宗でなければならない所以を明らかに信知せしめられる。

生死の苦海、難度海を度る法は、種々に尋ねられ示されるが、「真実信心の称名は　弥陀回向の法」である。仏がわれわれの上に名告り出て、仏がわれわれの上にあたえたまう法である。われわれの口からもれでる一声一声の称名は、苦悩の群萌を愍んで大悲の如来が名告り出でたまう法である。これによって称念しつつも自力の心の離れ難いことを痛み「不回向となづけてぞ　自力の称念きらはるゝ」というのである。所定の紙数を超えた今、多くを語ることは許されないが、最後にこの意趣を伝灯した蓮如は同行に懇切に次のごとく説いていることを挙げておきたい。

凡夫のなす所の回向は自力なるがゆへに成就しがたきによりて、阿弥陀如来の凡夫のために御身労あり、此回向を我等にあたへんがために、回向成就し給ひて、一念南無と帰命するところにて、此回向を我等凡夫にあたへましますなり。故に凡夫の方よりなさぬ回向なるがゆへに、これをもって如来の回向をば、行者のかたよりは不回向とは申すなり。(『御文』三―八)